



システィナ礼拝堂のエレミヤ(ミケランジェロ)



阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

3月例会報告 (2019年3月24日開催)

聖書研究 エレミヤ書

桜の季節も終わり、これからいよいよ新緑の季節。そして今日イースターを迎えました。阿佐ヶ谷教会では4月から新しい年度となり、信友会もあらたな体制でもってこの1年の計画をたてました。毎月の例会では連続して聖書研究の学びをしていますが、今年度も先期に引き続き旧約聖書の「預言書の世界」をテーマとしました。なかでも今回のエレミヤ書はユダ王国が衰退に向かい、やがてバビロン捕囚によって滅亡するという時代背景を抱え、読みごたえのある大変興味深い世界が描かれています。

この1年間信友会の皆様とともに旧約聖書を中心にした、豊かな学びの時をもちたいと願っています。
(Y. O)

『預言者エレミヤ』—その時代と信仰—

古屋治雄牧師

旧約聖書の預言書では、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書の順に掲載され、聖書の分量も多く三大預言書と呼ばれます。今年度は歴史的に活躍した時代の古い順に学んできており、アモス、ホセヤに次いで大島力先生により「第1イザヤ」を学んできました。

今回は、次の時代に現れた「預言者エレミヤ」を学ぶことにします。時代背景としては、栄華を誇ったダビデ王、ソロモン王の時代が終焉した後、イスラエルは北イスラエル王国と南のユダ王国に分裂しました。北イスラエル王国は、政情不安の中、王権の篡奪が繰り返され北の巨大な帝国であるアッシリアに滅ぼされます。この時代に預言者アモスやホセアが王や民衆に土着のバアル信仰を止めてヤーウェ信仰に立ち返るよう預言を繰り返したのですが、紀元前722年にサマリアが陥落し王国は滅亡します。

南のユダ王国は、ベニヤミンとユダという小さな地域の王国でしたが、ダビデ・ソロモンの血統を受け継いだ王国であり、北イスラエルと違ってエルサレムの神殿を中心に祭儀が行われるなど安定した政治が行われていました。しかし安定政権であったウジヤ王の死後、アッシリアと同盟していた王国がイザヤの預言を無視してエジプトと同盟を結んだ結果アッシリアのセンナケリブ王に国土は蹂躪され、エルサレムは包囲され滅亡寸前にまで追い込まれたが、突然アッシリア軍が撤退して難を逃れました。

預言者エレミヤの召命

エレミヤの名は、「主は高くしたまわんことを」という意味です。エレミヤの預言者としての活動は、紀元



前627年から始まります。エレミヤ書の冒頭、エレミヤはエルサレムの北に位置するアナトの祭司ヒルキヤの子で、主が彼に臨んだのはアモンの子ヨシヤ王の時で、それから4代の王の時代に預言者として立ち、バビロン捕囚まで続いています。

エレミヤの召命は、1章4節～19節まで神の召しの言葉があります。5節には、「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し 諸国民の預言者として立てた」。しかしエレミヤは6節で「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから」預言者としての召命を辞退しています。9節では、「見よ、わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける。」10節では「見よ、今日、あなたに諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために。」そして16節では、神は「わたしは我が民の甚だしい悪に対して裁きを告げる。彼らはわたしを捨て、他の神々に香をたき 手で造ったものの前にひれ伏した」。神は、他の神々に走った民を滅ぼすと言うのです。



バビロニアの台頭の時代

時代背景では、アッシリアの勢力が減退し始めます。替わりに新バビロニア帝国が台頭してアッシリアに挑戦するようになり、最終的にカルケミシュの戦いでアッシリア帝国は崩壊します。この過程でイスラエル周辺の諸国はどちらの国に付くかをめぐって右往左往します。ユダ王国は新バビロニアに付いてアッシリアに対峙しますが、アッシリアには南の巨大帝国のエジプトが付きます。そんな中でユダ王国のヨシヤ王は、安定した政権を築き31年間王位にありました。列王記下22章2節でヨシヤは「神の目にかなう正しいことを行い、父祖ダビデの道をそのまま歩み、右にも左にもそれなかった」。ヨシヤによる宗教改革ではサマリアなど北イスラエルの主要な神殿を取り壊すなど偶像礼拝を排して、エルサレム神殿でのヤーウェ信仰を取り戻すなどの善政を行いました。しかし、アッシリアと新バビロニアとの闘いで、ヨシヤ王はアッシリア支援のため北進し

てきたエジプトのネコ王の軍を阻止する戦いを挑んで戦死します。(列王記下23章29節)

その後のユダ王国は、エジプトのネコ王の支配下で擁立されたユダの王がヨヤキム、ヨヤキン、ゼデキヤと目まぐるしく変ってゆき、新バビロニア帝国と対峙することになります。ヨシヤ王以後にネコ王により擁立された王たちは皆、「主の目に悪とされることをことごとく行った。」と書かれています。このような政情の中で預言者として立つことになったエレミヤは、「悲しみの預言者」と呼ばれます。エレミヤはバビロニアかエジプトか等の政治的な選択を迫るのではなく、偶像礼拝を排除して神に立ち返れと預言したのです。

エレミヤの預言

7章に「神殿での預言」があります。王や民が主の言葉に聞き従わないことへの警告を行い、25節から「お前たちの先祖がエジプトの地から出たその日から、今日に至るまで、わたしの僕である預言者らを、常に繰り返しお前たちに遣わした。それでも、わたしに聞き従わず、耳を傾けず、かえってうなじを固くし、先祖よりも悪いものになった」。エレミヤは、主の目の前で悪を行っているのを見て、主がバビロニアを用いてユダ王国を滅ぼす器とするとまで預言しますが王や民は聞く耳を持ちません。

20章7節からエレミヤの告白があり「主よ、あなたがわたしを惑わし、わたしは惑わされてあなたに捕らえられました。あなたの勝ちです。わたしは一日中、笑い者にされ人が皆、わたしを嘲ります」。9節で「主の名を口にすまい もうその名によって語るまい、と思っても 主の言葉は、わたしの心の中 骨の中に閉じ込められて火のように燃えあがります。押さえつけておこうとして わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。」ユダ王国の滅亡を預言しなければならないエレミヤの苦悩がありますが、エレミヤはヨナのように逃げ出さず踏みとどまり預言し続けました。

「王国不滅信仰」とその否定

イスラエルの民には、ダビデ王以来の王国不滅信仰があります。ダビデ王国は神の祝福を受けており永遠に続くとの預言者ナタン祝福の預言があります。「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。」(サムエル記下7章16節)

ユダ王国は、ソロモン王の後継のヤロブアム王の悪政により王国が分裂したとはいえ、ユダ王国がダビデ・ソロモン王朝の血統を引き継いだ王国であるとの意識が強くあり、神と王との契約により、王国と領土は永遠に保全されるという確信です。そんな中でエレミヤは警告し続けます。11章に「破られた契約」の小見出しがあります。エレミヤは、神との契約は、神がユダヤ人の先祖を鉄の炉であるエジプトの地から導き出したときに荒れ野で命令した契約であること。神の命じたことを行えば神の民となり、神はあなたたちの神になる。それは先祖に約束した誓い、すなわち乳と蜜の流れる地を与えるためでした。しかし8節には「彼らはわたしに耳を傾けず、聞き従わず、おのおのその悪い心のかたくなさのままに歩んだ。今、わたしは、この契約の言葉を彼らの上に臨ませる。それを行うことを命じたが、彼らは行わなかったからだ」。エレミヤは神に従わない民にダビデ王への王国不滅の預言は否定され厳しい審判が下されると預言し続けました。

列王記下24章で、ユダ王国の最後の王ゼデキヤは、先王に倣い「主の目に悪とされることをことごとく行い、」主の怒りをおかす王国は御前から見捨てられることになります。ゼデキヤは、バビロニアに反旗を翻します。紀元前587年、バビロニアのネブカドネツアル王が全軍を率いてユダ王国に攻め入ってエルサレムが包囲されます。ゼデキヤ王も逃亡したが、捕まり両眼を潰され青銅の足枷をはめられてバビロンに連行されます。またエルサレムは全て破壊つくされ、多くの民が連行されました。エレミヤはバビロンではなくエレミヤの預言に反感を持った人々によりエジプトに連行され、そこで死亡したとされています。

救済の預言

エレミヤはユダ王国の滅亡のみを預言したのでしょうか。エレミヤ書の編纂はバビロンからの帰還前後に行われており、そこで編集者によって民族の回復を願って追加されたのか。エレミヤには民族の回復の思

想が無かったとは言えません。32章に「アナトトの畑を買う」ことが書かれています。かつてエレミヤがアナトトで所有していた畑を買い戻してほしいと言う願いを受け、イス



ラエルの伝統的な制度と法に則り購入し、イスラエスが再興できる時が来たと宣言しています（15節）。このことは小さな事柄のように見えますが、イスラエルの破滅を貫いてしかしそこに神の民としての回復の予兆が語られています。

R・E・クレメンスは、これについて「バビロニアの一時包囲の解除という歴史に依拠しているのではない。純粹に希望の預言の言葉として、時間を超越し、無条件のものとして、神から与えられたのである。・・・希望は、信仰の歴史としてではなく、絶対的な真実として差し出されたのである。」と語っています。（要約文責：玉澤武之）

